

# 小さな花の唄

真・桜風夢想

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

真恋姫夢想の魏ルート、蒼天の霸王の後の話です。

目次

(最終話)	0
小さな花の、	5
小さな小さな、	4
恋の唄。	3
——	2
16	1
13	
10	
7	
4	
1	

北郷一刀が天の国へ還った。

華琳様が呉蜀の同盟を打ち破り、和議を結んだ。

事実上の大陸制覇の夢を成し遂げたのだ。

長い戦の時代も終わり、これから始まる平和の時代への祝宴が開かれる中、一刀と共に暫く姿が見えなくなっていた華琳様が、目の下を腫らして帰って来た。

酒を浴びる程飲み、既に出来上がってる周りは気付いていなかったみたいだけど、私だけは見逃さなかった。

だけど、聞いてみても

「酔いが回っただけよ。少し風に当たっていたの」  
とだけ言っただけで宴の中へと消えていってしまった。

私は、何も言えなかった。

私は、何も聞けなかった。

一刀は？なんて、聞ける訳がなかった…

翌日、宴も終わり呉蜀の人間達は自分の国へと帰って行った。

戦が終わったらいよいよ平和です、という訳にもいかない。

三国での同盟、国境や道の整備。

やる事は山ほどある。

これから忙しい毎日が始まるという最初の朝。玉座に全ての将が集められた。

だけど、その中に一刀の姿は無かった。

「皆、酔いはしっかりと覚めているかしら？」

「華琳様。まだ北郷の馬鹿が起きて来ておりませんが」

「そうね。その話をしないとね」

華琳様の顔に影が差した。

「一刀は、天の国へ還ったわ」

静寂。

誰も、声を発する事が出来なかった。

風や稟は勘づいていたみたいだけど、他は華琳様の言葉の意味を理解出来ていない様だった。

「あ、あの…華琳様…？お言葉ですが、お戯れにしては、少々…」  
華琳様の言った事の意味を理解出来なかったのか、理解したくなかったのか、春蘭は顔を少し引き攣らせながらなんとか言葉を捻り出す。

「これは、嘘でも遊びでもなく、事実よ」

暫くの静寂の後、沙和が膝から崩れ落ちる。

そして、泣き出す者、呆然と華琳様を見続ける者、ただじつと拳を握り締め、震える者。

ざわつく一同を見て、華琳様が声を上げる。

「今は泣きなさい。今は怒りなさい。でも、私達にはこれからやらなければならぬ事が山ほどある。

私達が掴み取った平和、今まで死んでいった、奪ってきた民達の願った平和。

そして、一刀が作ってくれた平和を、私達が繁栄させる。

その義務がある！」

「だから、今は泣いて、泣き終わったら仕事に入りなさい」

それだけ言い残し、華琳様は玉座を後にした。

去っていく華琳様の頬には、涙があった。

私は、悔しかったのだろうか。

私は、羨ましかったのだろうか。

一刀は華琳様の隣にいた。

私が居たかった場所、焦がれた場所。

私が、憧れた場所。

一刀が居なくなつて清々した。  
これで、憧れの場所へ行ける。  
これで、華琳様の隣へ立てる。  
そう思った。  
けど。

だけど。

何故、こんなに、辛いんだろう。

「桂花！今日休みだったよね！」

「…は？」

人が折角華琳様から頂いた休暇をゆっくり過ごして居たのに、脳が下半身と直結してるこの男は何の前触れもなくそれをぶち壊してきた。

「私が休みだったらなんなのよ」

見れば、脇に小さな酒樽を抱え、小さな花のついた木の枝を持っていた。

あの花は…なんだったかしら？

「ほら、最近少し冷えてきただろ？さつき警備隊で街を回ってた時にオヤジさんから良いお酒を貰ったから一緒に飲んで暖まろうと思ってるよ」

ニコニコしながら嬉しそうに言うこの顔が憎たらしかった。

「で！なんで！私が！折角の休みをアンタと酒を飲まなきゃならんいのー！」

「はは、相変わらず手厳しいなあ。思いつきって訳じゃないんだけど、ほら、この花見たら桂花と一緒に飲みたくなつたつてのもあつてさ」

そう言つて一刀は手に持った花を見せてきた。

そう、確かこれは…

「俺の居た国だと、銀木屋つて言うんだけど、こつちだと桂花つて言うんだろ？」

そう言いながら私の向かいに“勝手に”座り、杯にお酒を注ぎ始めた。

そして、互いのお酒に花を乗せる。

「アンタ…分かってやってんの？」

「ん？何が？」

はあああああ…

つい溜め息が出る。

コイツと話してるといつも頭が痛い。  
勝手にやって来て勝手に私を掻き乱す。

「お花見ってあるだろ。まだ桜や桃の咲く季節じゃないけど、お酒に花卉が乗ると風流だねなんて言いながら飲むもんならだっせ。自分で乗せちゃ意味無いけど」

そう言っただけで笑いながら自分の杯を空ける。

私も、これ以上怒鳴った所でコイツが居なくなる訳もなく、仕方なく口をつける。

「ん…意外と美味しいじゃない」

つつい美味しくてすぐ飲み干してしまった。

それを見て嬉しそうに新たに注いでくる。

「確かに美味しいお酒だけど、これで酔わせて襲おうたってそうはいかないから」

「はは、違う違う。あわよくばって思わない事はないけど、今日は本当に桂花と飲みたかっただけだよ。」

「最近忙しかっただろ？少しでも疲れを取れたらなって」  
ほら、やっぱり。

コイツの脳は下半身と直結してるところか、下半身に脳が付いてるんじゃないかしら。

そう思いながらも、飲む手は止まらなかった。

このお酒に罪はない。

今回は、素直に受け取ってあげてもいいかしら。

普段では思いもしない事を思ってしまう。

これもきつと、お酒のせい。

「銀木犀って、普段は気にした事無かったけど、良い香りだな」  
花の浮かぶ杯を見ながら少し赤くなった顔で言う。

「これまた俺の居た国の話しなだけだよ。花言葉つてのがあるんだ。色んな花や木に意味を持たせて、相手に送ったりって風習があるんだよ」

私の方を見て笑いながら

「銀木犀、桂花の花言葉は初恋、唯一の恋、なんだよ」

そう言った。

~~~~~

「ん、んん…」

朝。

華琳様の口から北郷一刀が天の国とやらに還ったと聞かされてから数日が経った。

なんだか懐かしい夢を見た気がする。

これからが国にとって、大陸にとって1番大事な時期だ。

感傷に浸ってる場合じゃない。

目を覚ますため、頬を軽く叩いてから着替えて私は玉座へとむかう。

イライラする。

華琳様が大陸を制覇され、一刀が居なくなつてからひと月ほど経つた。

少しづつではあるが、三国間での話は進み各国は賑わいを増していった。

戦は終わつても五胡の侵攻や賊との争いは終わらないが、三国で協力し合い被害も最小限に止められている。

だけど、魏、とくに洛陽や許昌はまだ沈み込んだままだ。

街の人達は、警備隊の隊長として常に一緒に居た一刀が天へ還つたと知らされてから、以前の活気が失われてしまった。

それでも、それぞれの生活もある。

最初の頃は店を閉めていた商店もあつたけれど、今はなんとか商売を再開し始めた。

街の活気が無い1番の原因、それは将にあつた。

戦時中のあの勢いはどこへ行ったのか。

街の、民の見本となるべき魏の将兵がこれでは、今後のこの国の問題となる。

イライラする。

イライラする。

華琳様はそれを責める事はしない。

近くで見ている私には分かる。

1番悲しみたいだろう。

1番泣きたいだろう。

1番、全てを投げ捨てて探しに行きたいだろう。

でも、華琳様はそんな様子を見せない。

王たらんと、今まで以上の激務をこなし続けている。

そんなお姿を見て、何故自分もと立ち上がれないのか。

そんな日が続いていた。

「春蘭、邪魔よ。仕事もせずただ泣いているだけの人間はここには  
いらないわ。出て行ってちょうだい」

私は、我慢の限界だったのだろう。

書簡を運んでいる時、視界の端に見えたべそべそと子供の様に泣い  
ている春蘭を見て、言わずにはいられなかった。

「なんだと…？」

「はっ！魏武の大剣が聞いて呆れるわね！あんな男が1人居なく  
なったからって子供みたいにビービー泣き喚いて！情けないったら  
ありやしないわ！」

それを聞いて春蘭が掴みかかってきた。

「貴様ア！私を愚弄するだけでなく、北郷をあんな男だと!?奴がど  
れだけこの国の為、華琳様の為に生きていたか分からないのか！」

「1番大変な時に急に居なくなつた薄情な男の事なんて知つたこつ  
ちやないって言つてんのよ！」

「薄情なのはどっちだ！北郷が居なくなつて、何とも思わんのか！  
そんな奴は今ここで叩つ切つてくれるわっ！」

「止めろ姉者!!」

春蘭と一緒に居た秋蘭が間に入る。

「頼む桂花。それ以上は言わないでくれ。姉者は直ぐになんとかす  
る。それまでは姉者の分も私が働こう。だから、頼む」

そう言う秋蘭の後ろでまた春蘭は膝をついて泣き出す。

イライラする。

イライラする。

イライラする。

春蘭だけじゃない。

沙和や季衣もまだ部屋に閉じ籠る事が多いし、働いていても覇気の  
無い者が多い。

新しく警備隊の隊長へと任命された風。

それに稟、風達も頑張っているのに。

何より、華琳様があんなにしておられるのに。

これでは、呉や蜀に笑われてしまう。

華琳様の兵が、華琳様の顔に泥を塗っているのが、私にはどうしようもなく、我慢ならなかった。

そして、こんな現状を招いた張本人が元の世界とやらで呑気に暮らしていると考えると、本当に、許せなかった。

いつからだろう。

自分でも自覚出来るくらい、色んな物に苛立ちをぶつけてしまっている。

春蘭との事もそうだ。

いつまでも泣いていてムカついていたし、国の事を思えば怒るのは当然だと今でも思っている。

だけど、あれはただ自分の苛立ちを春蘭にぶつけていただけ、八つ当たりだ。

確かに、昔から私は自分の感情を表に出しやすい方だった。

でも、最近はそれがより大きくなった様に思える。

いつからだろう。

もし、これが一刀が居なくなった事と関係があったら。

そんな事を思うと、寒気がする。

時間があったら、またイライラしてしまう。

そう考え、私は今まで以上に仕事に明け暮れた。

最近は食欲も無く食事も最低限で抑え、寝る間も惜しんで仕事をした。

そんな私を見て華琳様も気にかけてくださった。

休暇を取る様に言われたが、それも断り仕事に戻る。

今が1番大切な時だ。休んでる暇はない。

ただでさえまだ立ち直ってない将兵も多く居る。

ここで私が抜ける訳にはいかない。

そしてなにより、長く話して華琳様にも苛立ちをぶつけてしまうのではないか。

そう思うと、怖くてたまらなかった。

人との関わりを仕事で必要な時だけにして、食事も簡単な物を部屋で取る様になった。

仕事に集中していれば、人にあたらなくて済む。

アイツの事を、考えないで済む。

「風、いる？入るわよ」

アイツが言っていた、今では魏で当たり前になった”ノック”をしてから執務室へと入る。

「おや、桂花ちゃん。なんだか久しぶりに会った気がしますね」

「顔色が優れない様ですが、大丈夫ですか？」

入室すると、そこには稟も居たようだ。

「忙しいんだから仕方ないでしょ。それよりこれ、風の担当だったわよね。少し聞きたいのだけど」

椅子に座りながら机に書簡を広げ、話を始めた。

「そ、分かったわ。また何かあったら来るから。よろしくね」

「桂花、最近すっかりと休みは取っていますか？先程から少しふらついていますよ？」

話を終え、椅子を引くと稟が心配そうに聞いてきた。

そんなに疲れている様に見えるのだろうか。

ここ最近、鏡を見て身嗜みを整えた記憶がない。

「さつきも言っただけど、忙しいのだからしょうがないわよ。皆しっかり働いてくれればこんなになってないわ」

そう言っただけで立ち上がろうとするが、上手く立てなかった。立ちくらみ…？

「桂花！」「桂花ちゃん！」

そこで、私の意識は、途絶えた。

~~~~~

外が妙に五月蠅い。

これは、土を掘る音…？

「兄様、おにぎり作ってきましたよ！少し休憩にしませんか？」

「ああ、ありがとう！ふふふ…桂花め、これは絶対に驚くぞ」

「に、兄様…悪い顔してますよ」

一刀…？

私を驚かすって、私の真似して落とし穴でも作ってるのかしら？  
それを本人の聞こえるところでやってちゃ意味無いじゃない。  
そう思っって勢いよく窓を開く。

「ちよつと、アンタ人の部屋の前でなに騒いでんのよー！」

怒鳴りつけてやると流琉と一刀は素っ頓狂な声を上げて驚いた。

これは…確かに地面を掘っていたけど、落とし穴じゃない？

「は、ははは。バレちゃったか。完成してから見せたかったんだけどなあ」

泥だらけの顔で笑いながら恥ずかしそうに頬を掻く。

一刀達が作業していた場所。私の部屋の窓の下の少し横には、小さな木が植えられていた。

「これさ、さつき流琉達と賊退治に行った帰りに生えてたから持ってくるの手伝ってもらったんだよ」

それは、以前一刀が話していたものだった。

「まだ小さいし、花のつく時期じゃないけど、花が咲いたらいつも疲れてる桂花の癒しにならないかなって」

そう言っってコイツは、また笑った。

周りで人の話し声がする…

よく聞こえない…

寝ていた？

直前の記憶が曖昧だ…

「では、治療を始める。少し下がっていてくれ」

治療？誰が…私が？

状況を把握する為にも、とりあえず起きないと…

あれ、起き上がれない…

身体中が強ばっている様な感じで力が入らない。

「元気に、なああああああれええええええええええ!!!」

耳が痛くなるくらいの声がしたと思ったら、背中や肩数ヶ所にチクつとした感覚が走る。

すると、先程までの強ばりが嘘の様に無くなっていく。

「なんなのよ…五月蠅いわね…」

なんとか腕に力を入れて起き上がろうとすると、ガッツリと肩を掴まれた。

「おっと。まだ動いちやいかんぞ。俺は少し退出するが、帰って来るまで起き上がるなよ」

「礼を言うわ、華佗。後でよろしくね」

「なに、お易い御用さ」

華佗…華琳様の頭痛を診ている医者の名前の筈だけど、何故私の治療を…？

それに、この声は華琳様？

「まったく。無茶し過ぎよ、桂花」

私が横たわっている寝台の横へ椅子を引いてくると腰を下ろす。

「色々要因はあるみたいだけど、倒れた1番の原因は疲労だそうよ」

「申し訳…ありません…」

悔しい。

情けない。

この程度で倒れてしまう自分が、弱い自分が憎い。

「貴女に一つ、命令を与えるわ。暫く、休暇を取りなさい」

休暇を取る？

私が？今？

「そんなっ！私は、もう、必要ありませんか!?この程度で倒れる様な私はっ！まだ働けます！まだやれます！だから、だから…どうか…お傍に…」

悔しい。

悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい。

私はまだ出来る。

私はまだ働ける。

私はまだ華琳様のお傍に居たい。

ただ、それだけなのに…

「違うわ桂花。落ち着きなさい。華佗にも言われたでしょ。まだ動いては駄目よ」

優しい華琳様の声。

優しい手で頭を撫でてくださる。

嬉しいのに、涙が止まらない。

私は、華琳様に、華琳様だけには捨てられたくない。

もう、失いたくない。

「今は呉蜀との連携も上手くいつている。貴女のおかげよ。貴女が身を粉にして働いてくれたから、予定よりも早く計画が進められている。冥琳や朱里も驚いていたわ」

「だから、今はしっかりと休みを取りなさい。ゆっくり休んで、また、私を助けてちょうだい」

止まらない涙を拭ってくれる華琳様のお声は、泣きじゃくる子供をあやす様に、どこまでも優しくかった。

「入るが、構わないか？」

入口の外から華佗の声が聞こえる。

「ええ、大丈夫よ。そうだ、桂花。あと一つ言わなきゃいけない事があつたわ」

立ち上がってお召し物を整えた華琳様が私の顔を見て笑う。

「今回は貴女に先を越されたけれど、まだ負けを認めた訳じゃないわよ」

先を越された？負けを認める？

起きたばかりでモヤモヤしてる私の頭では意味を上手く理解出来なかった。

そんな私の表情を見て

「まだ、私は何も諦めてないって事よ」

そう言つて華琳様は部屋を後にした。

その後、華佗から今の私の身体の事、これからの過ごし方の注意点を聞かされた。

「まあ、こんな所だな。あと何か聞いておきたい事はあるか？」

「一つ、いいかしら」

「おお、なんだ？何でも聞いてくれ」

「お酒は、飲んでも大丈夫なの？」

「酒か。本当は控えて欲しいが、少量ならまだ問題ないだろう」

「そう、分かつたわ。後は大丈夫よ」

「そうか。俺はまだ許昌に居る。何かあれば直ぐに呼んでくれ」  
華佗はそう言い残して部屋を出た。

そして、部屋の前に居た侍女を呼ぶ。

「買ってきて貰いたいものがあるのだけど、お願いするわね」

そう言つて私は”メモ”を手渡した。

これも、一刀が広めた物だったわね。

(最終話) 小さな花の、小さな小さな、恋の唄。

一刀が居なくなつてから、4ヶ月程が過ぎた。

まだ完全では無いにしても、少しづつ将兵や街の人達も活気を取り戻しつつある。

4ヶ月。

もう、そんなに経つんだ。

私は

北郷一刀が嫌いだった。

北郷一刀が憎かった。

消えてくれ、居なくなれ、そう願っていた。

そして…憧れた。

今ならはつきりと、あの頃の自分の気持ち分かる。

『奴がどれだけこの国の為、華琳様の為に生きていたか分からんかっ!』

分からないわけ、無いじゃない。

好きの反対は嫌いではなく、興味が無い。とはよく言ったものよね。

怒鳴つたり、怒つたり、落とし穴を掘つたり。

それでも懲りずにアイツは、私に笑顔を見せた。

それが、どこか楽しかった。嬉しかった。

侍女に買ってきて貰った物を風呂敷に包み、部屋を出る。

「荀彧様! まだ、あまり出歩かない方が…」

「大丈夫よ。そんなに長くならないで戻ってくるわ」

それだけ言つて歩き出す。

まだ体が少し気だるい。

ずるずると引き摺る様に歩いていると、前から春蘭が歩いて来た。

「桂花か。もう、歩いて良いのか?」

「ええ、問題ないわよ」

鎧を着ている。兵の鍛錬か賊討伐だろうか。

「アンタこそ、もう大丈夫なんでしょうね」

「すまなかつた。悲しくないわけでも無いし、北郷を忘れるわけでも無いが、いつまでも泣いているわけにはいかんからな」

「…遅すぎるわよ」

少し嫌味っぽく言うと、春蘭は笑う。

「秋蘭にもこっぴどく怒られた。これ以上、民に情けない姿を見せるな、とな」

そう言つて、私の荷物を勝手に持つ。

「ちよつと、乱暴に扱わないでもらえる？それに、これから仕事じゃないの？」

「仕事帰りだ。もう昼だぞ。賊などやる気の欠片も感じん程に呆気なかつたのでな。どこまで運べばいい」

春蘭の勝手さ。

なんだか、一刀に似ている気がする。

そう考えると少し笑えてきて、小さく溜め息が出る。

春蘭とも、ずつといがみ合っていたけれど、これからも言い合うのだらうけれど、今くらいは素直に受け取ってやってもいいか。

今まで思いもしなかつた事を思う。

「そ。じゃあ、私に着いて来て」

「なんだ、今日はやけに素直ではないか。いつもそうだとこちらも楽なのだがな」

「ふん、今日だけよ」

まだ本調子でない私の歩く速度に合わせて、春蘭が後ろを歩く。

コイツも、こういう気使いが出来るようになったのね。

人はいつまでも子供でいられない。

少しづつ、変わっていく。

私も、少しは変わったかな。

「お前が寝ている間に皆、華琳様から話を聞いた。そんな状態のお前に全て任せてしまつてすまなかつたな」

「私だって華佗に言われるまで知らなかったわよ。それに、兵の鍛錬なんかは私には出来なかった事よ。そこは風や霞に任せていたから、謝るならそっちに言いなさい」

「そうか。しかし、他の誰でもなく、桂花だとはな。沙和や華佗は悔しそうにしていたぞ」

『何でアタシじゃないっすか！羨ましいっす！』

そんな事を言う華佗が容易に想像出来る。

暫くそんな話をしているうちに目的地へ着いた。

「ここで大丈夫よ。ありがと」

「お前からありがとうと言われる日は来るとはな。明日は季節外れの雪か？」

「…もう一生アンタに礼を言わないわ」

荷物を受け取って風呂敷を開く。

「なんだ、お前の屋敷の庭ではないか。ここで何をするんだ？」

「何もしないわよ。それより、華琳様に報告は行かなくていいの？」

「はっ！そうだった！遅くなるとまた怒られてしまう！悪いが私はもう行くぞ！身体には気をつけろよ！」

そう言い残してバタバタと走り出す。

相変わらず騒がしい奴ね。

そう思い、笑いながら風呂敷の中の荷物を出していく。

御座、杯、そして、あの時のお酒。

御座を敷いてその上に座り、お酒を注ぐ。

「まだ、時期ではなかったわね」

私の前にある、前よりも少し伸びた、一刀が植えてくれた花。

それはまだ蕾もついていない、青い葉があるだけ。

「少しまだ肌寒いわね。もう1枚何か羽織ってくれば良かったかしら」

春とはいえ、やはり暖かくしてくれば良かったか。

まあ、このお酒を飲んでいれば暖かくなるでしょ。

そう思い1口、お酒を口に含む。

あの時と同じ、甘い香りが鼻を抜ける。

~~~~~

「銀木犀、桂花の花言葉は初恋、唯一の恋、なんだよ」

「……………で？」

私の手が止まる。

一刀のお酒で赤くなった顔が更に赤くなった。

「俺は桂花に恋をしていますよって意味でこの花持ってきたんだけど」

「はっ！アンタに好かれても嬉しくないわね」

「はははは、桂花は相変わらず手厳しいなあ。喜んでくれてチュウくらいは出来るかなあと思ってたのに」

「するわけないじゃない、気持ち悪い」

私の顔が熱いのは、お酒のせい。

私の顔が赤いのは、お酒のせい。

コイツのこんな言葉で、嬉しくなる訳がない、恥ずかしくなる訳がない。

だから、誤魔化す様にお酒を飲む。

自分の奥底の気持ちに、気づかない為に。

~~~~~

あの時の事を思い返す。

今だったら、どう返していたのだろう。

今だったら、口付けくらいはしてやったのだろうか。

今はもう、出来ないけれど。

ゆっくりとお酒を飲んでみると、少し日が落ちてきた。

少し長居をしてしまったかしら。

暗くなる前に戻らないと。

最後にと杯にお酒を注ぐ。

ねえ、一刀？

いつ、帰ってくるの？

あんまり待たせすぎると、アンタの顔なんか忘れてやるから。あんまり待たせすぎると、この子の顔、見せてやんないから。だから。

それが嫌だったら、早く戻って来なさい。

最後の一口を飲み干し、荷物を片付けて医務室へと戻る。

まだ咲いていない、銀木犀。

一刀が植えてくれた、銀木犀。

この花が咲く頃、私は、母になる。